



対話を大切にした子どもが探究する学びを求めて

— 愛知と沖縄をつないで — 授業者

沖縄県国頭村立安波小学校：Y・R先生

愛知県小牧市大城小学校：K・H先生

〔本実践の目的〕

本単元を通して、沖縄と愛知の児童がそれぞれの土地の気候や風土、産業や文化に興味・関心を持ち、主体的に学習に取り組めるように本学習単元の実践を設定した。学習意欲の喚起と双方の学びの深まりを目指すために、「なぜだろう?」、「どうして?」、「分からない?」という児童の思いや声を大切にしながら、グループや学級全体による協議や対話、愛知県大城小学校とのTV会議、資料等のやり取りによって主体性の高まりを期待して実践を行った。実践の中で児童の「もっと知りたい」、「もっと調べてみたい」という主体的探求心を高める手立てとして、安波小学校では可能な限り地元や地域の農家や漁業者に直接インタビューや調査等を行い、課題やテーマについて見方や考え方を深められるよう単元を構成した。

大城小学校では、児童の主体性を高める手立てとして、児童を学習テーマごとのグループに形成し調べ学習を取り入れたジグソー学習のスタイルと、沖縄の子どもたちとのTV会議を単元内に設定した。

(1) 単元名： あたたかい土地の暮らし [全11時間] ※ TV会議における交流を3時間設定する

6月28日(水) 第4時 沖縄の家のつくりと気候との関係について交流する。



沖縄の家のつくりと気候の特徴について交流する。台風に備えた沖縄の家づくりに率直に関心をしめし、愛知県のお友達の多様な見方や考え方に触れる。沖縄の子ども達も仲間の疑問への解答に気遣う。相手に分かりやすく、的確に・・・



交わす会話にも言葉が磨かれる。初めての学習内容における交流である。互いの緊張よりも互いに気遣う心が見え隠れし、時々会話が行き詰まる。双方の教師がタイミングよくケアに入り、対話による学びを促進させる。愛知、沖縄の双方の教師の資料の準備にも頭が下がる。子ども達の深い学びと対話による学びの成立に向けて教師たちの挑戦である。

沖縄のお家の屋根の上のタンクから、子ども達の探究心が沖縄の水事情へ向けられた。



愛知県と沖縄のダムの数が調べられ、愛知が7つに対し、沖縄のダムの数が15という事実が分かった。さらに子ども達の「なぜ」が発展する。愛知から事前に送られた木曾川の写真を沖縄の子ども達が見る。



「これ、海じゃないの」、「へえ～これ川なの?」
「これが、ダムじゃないの?」、「大きい!」

沖縄の子ども達の反応も率直である。1枚の川の写真を

媒体に互いの対話から多くの学びと新たな疑問が同時に発生する。結論として、「沖縄の地形から、沖縄の川は愛知の川よりかなり小さいので水を確保するためにダムが多くつくられた。」となった。

結局、沖縄のお家のつくり「屋根の上のタンク」から沖縄の水事情へ発展し、沖縄が南北に長い地形で川が短いという特徴など、子ども達の主体的な探求心が学びの広がりや深まりを成立させたことになる。

〔教師の学び〕

今回の愛知の大城小学校との交流授業は、安波小の4・5年生が3名しか在籍していないことを考慮して、近隣の安田小の4・5年生と一緒に(集合学習として)授業へ臨んだ。

安波小Y先生、安田小M先生とも初任校から2校目の学校で教職経験も5年経年研を終えたばかりである。彼女たちにとっても教科書に書かれていない地元沖縄の文化については未知の探究である。

右の2枚の写真、授業終了時に安田小の校長先生から助言を頂く。校長先生のこれまでの教職経験値が後輩を育てる。子ども達も校長先生の話にきき入る。まさに、授業者と子ども達が共に学ぶ姿である。さて皆さんは校長先生が写真のように授業に立ち入ることについてどう考えますか?…授業者と校長、子ども達と校長、すべての関係性がいから実現できている。



7月6日(木) 第9時 各県の歴史・文化、漁業についての交流

愛知や沖縄で水揚げされる魚の種類や、漁獲量等について調べたことを報告し合う。愛知の子ども達にとって、沖縄のカラフルな魚に関心が向く、こちらから沖縄の県魚グルクンについて報告した。

交流も今回が2回目で子どもや授業者も、前回の授業反省を踏まえて、質問への答え方や、訊きたい事のたずね方等、学びや対話の作法を意識してTVに向き合っている。



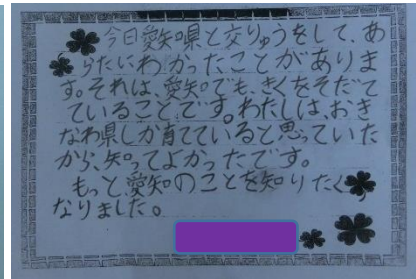
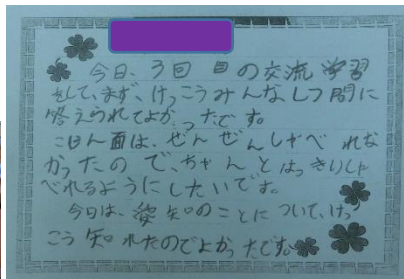
右の写真、愛知からの質問を教師が確認し、みんなに下ろしグループへの対話につなぐ授業者。質問に対して一人で考えるのではなく、グループで話し合い、確認する。さらにどのような相手に伝えたいのか議論される。この時間における個々の学びの広がりや深まり(多様な見方・考え方)への期待が高まる。



交流は沖縄のシーサーの文化についての報告に進んだ。子ども達はエジプトのスフィンクスやインドネシアのマライオンとの関連まで調べていた。

教科書や資料集の域を超え、子ども達の探究心に火が付く。授業終了後、やはりどこまで探究で踏み入るか?…教師の判断の難しさがあることを確認した。

授業終末、今日の学習の振り返りを書いた。意欲と成長と自己の反省から次へつながることが確認される。



7月12日(水) 第10時 沖縄の自然と農業についての交流



今回交流授業の最終章である。右写真、沖縄と愛知県の年間気温と降水量の比較グラフである。沖縄の農業について当然のようにパイナップルやサトウキビについての報告をしたが、両校の授業者は意外な「学びのネタ」を準備していた。

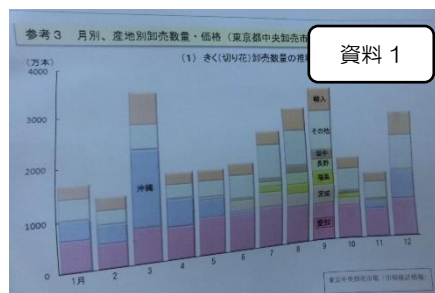
意外な農産物に共通点があった、なんと、キクの栽培出荷量にいて愛知県が全国1位で沖縄が2



位であるという事実を授業者たちはつきとめていた。子ども達の「なぜ」を最大に刺激し、探究へのテンションも上がった。「降水量も気温も全然違うのになぜ?」…先に提示した資料が役立つ、…考える…

「なぜ?」、やがて沖縄と愛知の生産時期についてボソボソと対話が交わされた。「沖縄の6月~9月までの生産量がほとんどないのは台風という気候の影響を受けるから。」「愛知が1年を通して生産できているのはビニールハウスでの栽培だから。」…対話に広がりや深まりが進行する。

同じ電照キク栽培でも、沖縄は露地栽培、愛知はハウス栽培であることが理解される。さらに、「沖縄が愛知を抜いて全国1位になるには?」あらたなテーマが生まれた。「沖縄でもビニールハウス」という考えも出たが、沖縄の子ども達の返事は「ノー」であった。…なぜだかわかりますか?



社会科における探求型授業の成立は資料の準備が勝負である。子ども達の関心や興味をそそる資料の準備こそが授業を主体的探究型授業に導くものである。教師の役割はあくまで目立たぬコーディネーター。

両校の授業者に頭が下がる。教育課程の調整、時間調整、教材研究、機器の準備と活用、ジグソー学習の計画と実践、資料の準備である。授業に見えない苦勞に感謝!ありがとうございます。 国頭学びの会ゆい